

朝鮮銅活字本『三國志演義』の成立について

陳 駿 千

一、はじめに

長編歴史小説『三國志演義』は、世に問われてから数百年にわたり、度重なる翻刻を経て、様々な「版本」^①が作り出されている。これらの版本の系統については、中川諭『三國志演義』版本の研究^②の分類が現在では広く行われている。それは、大きく二十四卷系、二十卷繁本系、二十卷簡本系といった三系統に分けるといえるものである。これらの系統の代表的な版本としては、二十四卷系の嘉靖壬午序本『三國志通俗演義』^④、二十卷繁本系の葉逢春刊『三國志通俗演義史傳』^⑤、二十卷簡本系の劉龍田刊『新鍍全像大字通俗演義三國志傳』^⑥がある。三系統間の相互関係や、同じ系統に属する諸本の相互関係などの問題をめぐって、数多くの研究が行われてきたが、現在に至るまで、定説にたどり着くものが少ない。

それに加え、近年、新たに発見された版本が次々と紹介されている。例えば、二十四卷系には、朝鮮翻刻周曰校甲本『三國志傳通俗演義』^⑧や、九州大学蔵『李卓吾先生批評三國志』^⑨があり、また二十卷簡本系には、九州大学蔵朱鼎

臣刊『考訂按鑑通俗演義三國志傳』¹⁰がある。これらの版本の発見は、既存の諸問題を解決するための手がかりを提供する一方、新たな問題をもたらしている。朝鮮銅活字本もまたその一例である。¹¹

朝鮮刊銅活字本『三國志通俗演義』残本一冊は、上下巻に分かれ、現存しているのは上巻三六〇四四、四六〇五六葉、下巻一〇四七葉の計六七葉のみである。下巻巻首に「三國志通俗演義卷之八下」とあることから、現存しているのは第八巻であることがわかる。また、現存部分の内容について、上巻は第一四七則「龐德擡觀戰關公」の途中から、第一五〇則「呂子明智取荊州」まで、下巻は第一五一則「關雲長大戰徐晃」から第一五九則「廢獻帝曹丕篡漢」の途中までの部分にあたる。すなわち、第八巻の上は一五〇則で終わり、下は一五一則から始まる。この事実から逆算すると、銅活字本は一卷にあたり二十則、全十二巻から構成されている、すなわち二十四巻系に属することがわかる。

この本で使われた銅活字は、丙子字と呼ばれ、一五一六年に朝鮮半島で作られ、そして一五九二年の豊臣秀吉の朝鮮出兵、いわゆる「壬辰倭乱」で失われた。すなわち、この『三國志通俗演義』は、一五一六年〜一五九二年の間に出版されたものであることは確定できらるであろう。¹² また、朝鮮半島の文献を手がかりに、その成立時期の範囲をさらに絞る研究も行われている。¹³

さて、この銅活字本は、どの版本を底本として成立したのか。この問題について、朴在淵（二〇一〇）¹⁴は、「朝鮮活字本の底本は周曰校甲本（嘉靖三十一年、一五五二）和嘉靖壬午本（嘉靖元年、一五二二）」、「本人認為、它是以周曰校甲本為底本、參照嘉靖壬午本作了進一步校勘的版本」と論じている。

一方、劉世徳・夏薇（二〇一〇）¹⁵は、「我們認為、朝鮮銅活字本の底本既不是嘉靖壬午本、也不是周曰校甲本、而可能是一個和嘉靖壬午本・周曰校甲本屬同一系統、大約和嘉靖壬午本・周曰校甲本同時或更早的某個版本」と反論して

いる。

また、金文京（二〇一二）も、「銅活字本『三国志通俗演義』残巻は、その分巻形式、また嘉靖本系統と福建本系統の双方にまたがる文字の異同など、従来知られる『三国志演義』にはない特徴がある。しかもその底本は、現存最古のテキストである嘉靖本（一五一一）より早い可能性が高く、『三国志演義』のテキストの系統と形成を研究するうえで貴重な資料である」と、朴氏と異なる説を提起している。

以上の説は、結論が分かれているものの、共通している部分もある。それは、朝鮮銅活字本は周曰校甲本、嘉靖本と同じ系統、いわゆる「二十四巻系」に属していること、そして、朝鮮銅活字本は、周曰校甲本に校勘を施された版本であれ、他のまだ知られていない版本の翻刻であれ、少なくとも、周曰校甲本あるいは嘉靖本をそのまま覆刻したものではないこと、という二点である。

この二点については、ほぼ疑う余地がないと考えられる。しかし、周曰校甲本、嘉靖本と同じ系統、つまり二十四巻系には、他にもいくつかの版本が存在している。現存の版本のみを取り上げても、周曰校刊本には甲本のほか、乙本・丙本も存在しており、その他には夏振宇本と夷白堂本、更にこれら諸本の後継本である百二十回系諸本（複数種類の李卓吾本、及び李漁本・鐘伯敬本・毛宗崗本など）がある。朝鮮銅活字本は、二十四巻系の他の版本とはどのような関係にあるのか。また、朝鮮銅活字本は、これらの版本を底本として成立した可能性はあるのか——これが本稿で注目したい主な問題点である。

そこで、今回、各版本に混入されている誤文を手がかりに版本関係を推定する、という方法論を試み、この問題を解決の糸口を探りたい。周知の通り、『三国志演義』諸本には、誤字・脱字・脱文・衍字・衍文などの誤りが多く混入

されている。金文京（二〇一二）は銅活字本について、「刊本以前の写本の段階においては、言うまでもなく、書写のたびごとに、無意識の書き間違えや恣意的な書き改めによって、無意味な文字の異同が発生する。そのため刊行される段階でも、底本として使用する写本がまちまちであるため、テキスト間に内容とは無関係な文字の異同が生じることになるのである。内容の異同については、このようなバラバラな現象は生じないのである」と指摘しているが、このような現象は銅活字本に限るものではなく、いずれの版本においても存在しているものである。これらの「無意味な文字の異同」は、翻刻者の意識的な改変によるものではなく、翻刻者の不注意か誤解に基づいて発生したものであり、それらが混入された経緯を分析することが、版本関係を探る糸口になりうる。

今回用いる方法を簡潔にまとめると、以下のようになる。まず、校勘作業によって、誤文を見出す。つづいて、それらを他の版本のテキストと対照することによって、誤文がどの段階で、どのように混入されたかを推測する。さらに、他の版本には同じ誤文が存在するか否かを確認し、誤文混入の時点を推定する。これらを手がかりにして、各版本の系統づけや成立の先後を推定する。

次節から、誤文の分析を手がかりに、二十四卷系における朝鮮銅活字本の位置を推定し、朝鮮銅活字本の底本について探求したい。

二、朝鮮銅活字本の誤文の全体像

ここで、現存の朝鮮銅活字本残本の全文を点検し、そこに混入されている誤字・脱字・脱文・衍字・衍文をすべて取り出す¹⁵⁾。さらに、これらの誤文は他の諸本に存在しているか否かを確認する。比較の対象に、二十四卷系の嘉靖本・

周曰校本（朝鮮覆刻甲本、及び蓬左文庫藏丙本・夏振字本・夷白堂本¹⁷・李卓吾本¹⁸を選び、さらに参考として、「二十卷繁本系」の葉逢春本と、「二十卷簡本系」の劉龍田本をも比較の対象とする。以上の点検・比較の結果は付表に示す。

点検によって、朝鮮銅活字本の現存部分から、三三箇所の誤文を発見した。これらの誤文と諸本のテキストとの比較結果を統計し、左の表に示す。

同じく誤	比較不可	嘉	朝	丙	夷	夏	李	葉	劉
2	0	31	0	1	0	7	0	7	19
9	1	22	1	0	0	0	31	0	10
9	1	23	0	0	7	0	0	7	19
6	0	20	0	0	7	0	0	7	19
3	1	29	0	0	0	0	0	7	19
2	0	31	0	0	0	0	0	7	19
7	0	19	0	0	0	0	0	7	19
4	0	10	0	0	0	0	0	7	19

「比較不可」…对照本のテキストが改変されたため、同箇所は見当たらない。

「銅活字本のみ誤」…朝鮮銅活字本だけに見られる誤りと考えられる。

「誤にして不一致」…对照本の同箇所は誤るが、銅活字本とは異なる誤り。

「同じく誤」…对照本の同箇所は銅活字本と同じように誤る。

まず注目したいのは、「銅活字本のみ誤」の比率が非常に高いことである。銅活字本に見られる誤文の大部分は、他の版本には見られない。言い換えれば、他の版本と比べれば、銅活字本のテキストの正確さが一段と低い。その理由

として、銅活字本の文選工の技術が冴たなく、誤字の活字を多く拾った、という可能性はもちろん排除できない。しかし、版面の形式や印刷の質などの面から見るかぎり、銅活字本は技術面では決して他の諸本に劣るものではなく、むしろ精巧に作られていると言える。または、文字を一つ一つ新たに刻する木刻本に対して、既製の活字を拾って使う活字本には、細かい字画の異同による誤字がむしろ生じにくいと考えられる。したがって、銅活字本の誤文の多さの原因は印刷技術と考えるより、粗雑な版本を底本にして成立した、という可能性が考えられる。すなわち、銅活字本の製作者は、十分な校勘作業をせず、完成度の低い底本のテキストをそのまま翻字した。その結果、このような、印刷技術と本文内容の質的不一致が生じたと考えられる。

朝鮮銅活字本



美白堂本



周日校丙本



夏振字本



ちなみに、前掲劉・夏（二〇一一）及び金（二〇一二）は、銅活字本の底本が嘉靖本や周日校本より古い版本である可能性を示唆している。銅活字本の正確性の低さは、その可能性の裏付けとなりうる。

次に、「比較不可」とは、比較対象のテ

キストが改変されており、銅活字本と同じ箇所が見つからないケースである。二十四卷系諸本においては、更に簡略化された夷白堂本を除き、「比較不可」の箇所は朝鮮覆刻周曰校甲本に一箇所のみである。一方、二十卷繁本系の葉逢春本は七箇所、二十卷簡本系の劉龍田本は一九箇所見られる。この結果は、銅活字本のテキストが二十四卷系に近く、二十卷系とはある程度の距離があることを示している。前述した通り、銅活字本は二十四卷系に属していることはすでに証明されている。今回の点検で明らかになったことは、先行研究の証明結果をさらに確固たるものにする傍証となる。

しかし、その一方で、解釈に悩む結果も出ている。それは「同じく誤」の項目である。通常の場合には、二つの版本の間に共通する誤字が多ければ多いほど、版本関係が近いはずである。しかしながら、銅活字本には、同系統の嘉靖本や夏振字本との「同じく誤」の数が少なく、逆に系統が異なる葉逢春本との「同じく誤」の数が二番目に多い七箇所となっている。葉逢春本はそもそも朝鮮銅活字本と系統を異にするテキストであるため、テキスト中の文字にも相当の差異があり、両者の関係には隔たりがあるはずである。では、朝鮮銅活字本と葉逢春の間で「同じく誤」の数が多いのはどのように解釈すればいいのであろうか。

まずは、これらの「同じく誤」の内訳を詳しく見ることとしよう。計七箇所のうち、「四家纂」を「四家纂」にするもの¹⁹が五箇所、「鎮國寺」を「鎮國」にするもの²⁰が一箇所、「咎犯」を「呉起」にするもの²¹が一箇所含まれている。

それうち、「鎮國」の例については、付表のNo.19で示すとおり、銅活字本と葉逢春だけではく、周曰校朝鮮本・周曰校丙本・夷白堂本・夏振字本・李卓吾本も「同じく誤」となっている。この誤文は、系統をまたがった諸本に広く存在しているもので、おそらく相当早い段階、すなわち諸本の共通の祖本にすでに存在していたものと考えられる。

一方、「四家寨」と「呉起」の誤文は、二十四卷系諸本にはほとんど見当たらず、二十卷系諸本にのみ見られるものである。次節以降、この二つの例について具体的に検証したい。

三、「四家寨」と「呉起」の検証

まずは、「四家寨」の例を検証したい。場面は、第一五一則「關雲長大戰徐晃」に、樊城の援軍に馳せ参じた魏の徐晃が、蜀の関平と交戦するシーンである。双方の交戦の場所は、「四家寨」または「四家寨」と表記されている。この地名は、左の表で示す通り、⁽²²⁾銅活字本には六回見られる。

	頁	行	テキスト
ア	46	3	廖化屯兵在四家寨 _{名地}
イ	47	2	平不敢戀戰殺條大路逕奔四家寨來
ウ	47	8	手將曰四家寨鹿角十重雖飛鳥亦不能入何慮賊兵能入
エ	47	9	於是關平廖化盡起四家寨精，奔至第一屯駐扎
オ	48	4	平同廖化支持不住，棄了第一屯，逕投四家寨來。
カ	52	7	操重賞三軍，到四家寨遍觀徐晃所戰之地。

銅活字本には、「冢」に作るアの一箇所、「家」に作るイウカの五箇所が見られる。ちなみに、「四家」に作るアでは「寨」の二文字がなく、イウカでは「四家寨」で統一している。その原因としては、銅活字本の編者が、「四家」と「四家寨」とは別の地名であると誤解していた、という可能性が考えられるが、他に手がかりがない限り判断しにくい。

しかし、少なくとも、六箇所のうち五箇所が「家」に作るという事実から、銅活字本の編者がこの地名が「四家寨」であると思いついていたことが推測される。

この地名はについて、正史『三国志』卷十七「魏書・徐晃傳」には以下の記述がある。

賊圍頭有屯、又別屯四家。晃揚聲當攻圍頭屯、而密攻四家。羽見四家欲壞、自將步騎五千出戰、晃擊之、退走。²³

この地名は、正確には「四家寨」であり、「四家寨」は銅活字本の誤りであることがわかる。銅活字本の編者にこのような誤った印象を与えたのは、おそらく銅活字本の底本であり、「家」という誤文は底本の段階ですでに発生していた可能性が高い。

では、この誤文は他の版本には存在しているのか。銅活字本では「家」に作るイゝカの箇所は、付表のNo.5～No.9の部分に当たる。表の示すとおり、二十四卷系諸本は、周日校朝鮮本に一箇所のみ「家」になっている以外、すべて正しい「冢」になっている。一方葉逢春本は5箇所全て誤りの「家」になっており、劉龍田本では一箇所が「比較不可」、四箇所が誤文の「家」となっている。

すなわち、二十四卷系は正しい「冢」、二十卷系は誤りの「家」、という傾向が見られる。したがって、少なくともこのケースにおいては、二十四卷系に属している朝鮮銅活字本には、二十卷系の特徴を持つ誤字が見られる。

続いて、「呉起」の例を検証したい。場面は、第一五八則「漢中王怒殺劉封」に、関羽の死後、劉備のもとを離れ、魏へ亡命する孟達が劉備に送った書状の文句である。まずは銅活字本のテキストを示す。

臣聞、范蠡識微、浮於五湖、吳起謝罪、逡巡於河上。夫際會之間、請命乞身、何則。欲潔去就之分也。²⁴

この手紙は実在のものである。正史『三国志』卷四十「蜀書・劉封傳」の裴松之注にはその全文が掲載されている。同じ部分を左に抄録する。

臣聞、范蠡識微、浮於五湖、咎犯謝罪、逡巡於河上。夫際會之間、請命乞身、何則。欲潔去就之分也。²⁵

正史によると、孟達は「咎犯」の典故使っていたはずであるが、『三国志演義』銅活字本では「呉起」となっている。もちろん、『三国志演義』は小説である以上、必ずしも正史の文章を忠実に引用する必要がない。おそらく、小説の作者あるいは改編者によって、何らかの理由で変更されたと考えられる。ただし、「咎犯」が正史通りの記述であり、わざわざ「呉起」に書き換える必要性が感じられない。そのため、「呉起」は誤文であると判断してもよいのであろう。

この点を確認したうえで、比較諸本のテキストを見ることとしよう。付表No.29は「呉起」に関する諸本の比較結果である。夷白堂本と劉龍田本では孟達の手紙が省略されているため、「比較不可」となっている。それ以外、二十四巻系では正史と一致する「咎犯」、葉逢春本では誤文の「呉起」となっている。すなわち、この箇所において、銅活字本のテキストには系統が異なる葉逢春本と同じ誤文が見られる。

以上、銅活字本に見られる「四家寨」と「呉起」の二種類、計六箇所²⁶の誤文を分析した。その結果、これらの誤文は銅活字本と同系統の二十四巻系諸本には見られなく、かえって系統を異にする葉逢春本で見られる。この現象は、

銅活字本の成立過程を推測するための手がかりとなる。

四、銅活字本の成立過程

前述したとおり、二十四巻系の属する銅活字本には、二十巻系の特徴を持つ誤文が6箇所存在している。では、これらの誤文は、銅活字本の成立時に発生したものか、あるいは銅活字本の底本にはすでに存在していたものか。この問題を解決することによって、銅活字本の底本を考察するための手がかりが得られるのであろう。

まずは、誤文の発生が銅活字本の成立過程にある、という可能性を分析したい。それはすなわち、銅活字本は現存の二十四巻系諸本に近いテキストを持つ版本を底本にして成立した。前述した六箇所の誤文は、底本には存在しておらず、銅活字本の編者が何らかの理由で、もともと正しいテキストを誤ったものにした。また、「四家纂」は複数回出現しているものであり、「呉起」は典故に関わる固有名詞であるため、これらの誤文の発生は偶発的なものとは考えにくく、おそらく、銅活字本の編者が二十四巻系の版本を底本にしながら、葉逢春本に近い版本を参照して文字を改変したと考えられる。

しかし、この解釈はあまりにも不自然なものである。そもそも、『三国志演義』は娯楽を目的とする通俗文学作品であり、知識人層に特に重視されていなかったはずである。朝鮮では、儒学者の奇大昇が『三国志衍義』を荒唐無稽で学問を害する書物であると酷評していることは、先行研究によって広く討論27)されている。このような書物に、わざわざ複数のテキストを参照して校勘作業を行う必要があつたのであろうか。

本稿の冒頭で紹介したとおり、朴（二〇一〇）は、銅活字本は周日校甲本を底本に、嘉靖本を参照して成立したも

のであるとしている。この説に対して、劉・夏（二〇一一）は、

我們認為、這種可能性是不大的。那時的出版者印書的主要目的是為了牟利。對他們來說，最簡便的翻印辦法便是照著葫蘆畫瓢。時間、精力、興趣、成本，在限制著他們的想法和行為。他們不可能費九牛二虎之力，用兩個不同的底本進行校勘、來出版一部暢銷的小說。《三國志演義》朝鮮翻刻本以周曰校刊本甲本為底本正是一個有普遍意義的事例。²⁸

としている。また、金（二〇一一）も、

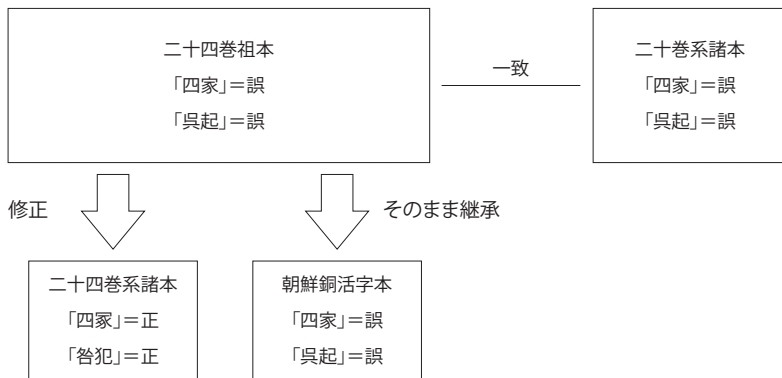
次に活字本の文字は、これも朴在淵氏が指摘されたように、周曰校甲本（その朝鮮翻刻本）と概ね一致するが、詳しく比較すると、嘉靖本や周曰校甲本とは異なり、かえって福建系統の葉逢春本と一致する場合もあり、きわめて複雑である。ただし葉逢春本と一致する部分は、みな内容には関係のない些細な文字であって、活字本が葉逢春本を参照して校訂したとは考えられない。当時の朝鮮に葉逢春本など福建系統のテキストがあったかどうかも不明である。²⁹

と述べ、銅活字本の編者が葉逢春本を参照した可能性を否定している。これらの先行研究の指摘しているとおり、当時の出版業者にとって、わざわざ労力を費やして、ストーリーとの関係性が低い些細な箇所に対して校勘を行う必

要性は感じられない。それに加え、本稿で問題とする六箇所はそもそも誤文であり、銅活字本の編者がわざわざ他のテキストを参照し、正確だった文字を誤文にしたとは、なおさら考えられない。したがって、この六箇所の誤文が銅活字本の成立時に発生したものである可能性は低いと考えられる。

では、もう一つの解釈、すなわち、六箇所の誤文は銅活字本の底本にも存在している。この底本は、現存の二十四巻系諸本より、葉逢春本を代表とする二十巻系に近いテキストを持つていると考えられる。したがって、銅活字本の底本は二十四巻系と二十巻系の中間段階の性質を持つものであり、現存諸本より、二十四巻系の祖本に近いテキストを持つ版本である可能性がある。そして、六箇所の誤文は、二十四巻系の祖本にも存在していた。それをそのまま継承したのは銅活字本であり、編者が誤文に気が付き、修正したのは銅活字本以外の二十四巻系諸本である。この解釈は、前述の複数底本説の問題点を解消し、銅活字本に見られる二十巻系の特徴を矛盾なく説明することができる。

以上の検証を通して、銅活字本の成立過程について、本稿において導き出せる、最も蓋然性の高い考え方は以下のようになる。



五、おわりに

本稿では、『三國志演義』朝鮮銅活字本に見られる誤文を考察し、二十四卷系に属する銅活字本には二十卷系の特徴を持つ誤文が存在していることを指摘した。その代表的な例として、「四家寨」と「呉起」の二種類、計六箇所誤文を手がかりに、銅活字本の底本及びその成立過程について仮説を提起した。

銅活字本の底本は、嘉靖本・周曰校本（朝鮮甲本及び丙本）・夏振宇本・夷白堂本・李卓吾本のいずれでもなく、おそらく上記諸本よりもっと古く、二十四卷系祖本に近い版本である可能性が高い。この仮説は、前掲劉・夏（二〇一）の判断に一致する。

以上の点は、銅活字本が二十四卷系に属しながら、自ら一つの独立した分枝となっている、という可能性を強く示唆している。また、銅活字本の底本は、現存二十四卷系諸本のいずれよりも古いものであり、遅くでも万曆中期以前にはすでに朝鮮半島に伝わり、翻印されていた。そうすると、『三國志演義』二十四卷の系譜図は今までの推測より更に複雑なものとなるかもしれない。この意味では、朝鮮銅活字本は『三國志演義』版本研究の新たな地平を開くものであり、替えがたい重要な価値を持つていると考えられる。

【付表】 朝鮮銅活字本誤文一覽表

No	則	則題	頁	行	誤	正	嘉	朝	丙	夷	夏	李	葉	劉
1	147	龐德擡櫬戰關公	1	1	起	超		○	○	○	○	○		
2	148	關雲長水滸七軍	15	4	般	船							×	×
3	150	呂子明智取荊州	33	8	丞	承		○	○	×		×		
4			41	2	說	?	○	○	○	○			×	×
5	151	關雲長大戰徐晃	47	2	家	冢							○	○
6			47	8	家	冢							○	○
7			47	10	家	冢							○	×
8			48	4	家	冢							○	○
9			52	7	家	冢		○					○	○
10	152	關雲長夜走麥城	56	2	欄	●							×	×
11	153	玉泉山關公顯聖	67	6	出	山山								
12			67	7	衆	舉		△去						×
13			67	10	皆	背								
14			68	1	弓末	引諸								×
15			68	3	末	棄								
16			71	3	末入	夢見								
17			71	6	夜	麥								×
18			71	9	泥	汜								×
19			71	9	鎮國□	鎮國寺		○	○	○	○	○	○	
20			72	6	日	是			○	○				×
21			73	8	折	拆		○		×	○			×
22	154	漢中王痛哭關公	80	1	禁	桀	○	○	○	×	△兇		×	×
23	155	曹操殺神醫華佗	91	5	華佗	周泰								
24			96	2	神	身				×			×	×
25	156	魏太子曹丕秉政	99	10	全	金								
26			102	2	畫	畫			△書	×				×
27			106	5	變	奕		○	○	×				×
28	157	曹子建七步成章	112	8	上	下								×
29	158	漢中王怒殺劉封	120	2	吳起	咎犯				×			○	×
30			121	10	漢中王□殺臣	要／欲		○	○	○				×
31			121	11	來	未								×
32			125	1	忘	亡		×	○	○				
33			125	1	陞	陞							×	×

「頁」は、上海古籍出版社影印本のページ数を示す。

朝鮮銅活字本の誤文を「誤」として記し、他の版本を参照し、最も意味が通ると考えられるテキストを「正」として記す。また、「正」を決めることが難しい場合、「?」で記入する。

○ = 「同じく誤」

△ = 「誤にして不一致」

空白 = 「銅活字本のみ誤」

× = 「比較不可」

付記・謝辞・本稿は、日本中国学会第七十一回大会（二〇一九年十月一三日、関西大学千里山キャンパスにて開催予定、台風により中止）において口頭発表する予定であったものを、加筆修正したものである。口頭発表準備の際、金文京先生、司会を担当して頂く予定の井口千雪先生より、参考資料及びご助言を頂いたことについて、両先生に感謝を申し上げます。本研究は、JSPS科研費19J10671の助成を受けたものである。

注釈

- (1) 現存の『三国志演義』は、木刻本が主流であるものの、活字本や、石印本などの形態も存在している。便宜を図るため、本稿ではこれらの印刷形態に関わらず、一律にして「版本」と称す。したがって、本稿で使う「版本」という語彙は、英語の「edition」に相当するもので、木刻本のみを指すものではない。
- (2) 汲古書院、一九九八年。
- (3) その命名の通り、二十四巻または十二巻から構成される版本は二十四巻系に、二十巻または十巻から構成される版本は二十巻系に属す。また、文章の繁簡や特定のプロットの有無などの特徴によって、二十巻系は二十巻繁本系と二十巻簡本系に分かれる。三系統及びその相互関係について、中川著書以外に、井口千雪『三国志演義成立史の研究』（汲古書院、二〇一六年）にも詳しく論じられている。
- (4) 古本小説集成編委会編『古本小説集成第三輯』（上海古籍出版社、一九九〇年）を参照所収影印本。
- (5) 井上泰山編『三国志通俗演義史傳』（関西大学出版部、一九九七、一九九八年）影印本を参照。
- (6) この版本に使われていた版本は、書肆の喬山堂を経営していた劉龍田によって作られたものであり、後に笈郵齋に渡り、部分的に改変された後「笈郵齋本」の出版にも使われていた。すなわち、笈郵齋本は、厳密的に言う和刘龍田本とはまた異なる版本である。このような、既存の版本を部分的に改刻するような現象は、大塚秀高「白話小説の版画をめぐる二、三のことども」（『集刊東洋学』第一一一号、二〇一四年六月）で論じられている。また、劉世徳・陳慶浩・石昌渝編『古本小説叢刊』第二輯（中華書局、一九九一年）所収影印本は笈郵齋本である。筆者は、二〇一九年十月二十七日〜十一月一日に、東奥義塾高等学校（青森県弘前市）所蔵の劉龍田本を調査し、全ページを撮影した。本稿で扱う劉龍田本のテキストは、東

奥義塾蔵本によるものである。劉龍田本について、前掲井口千雪著書には詳しい研究が行われている。

- (7) その代表的な著書には、前掲中川論著書、井口千雪著書とともに、金文京『三国志演義の世界』（東方書店、一九九二年）、魏安『三国演義版本考』（上海古籍出版社、一九九六年）、劉世徳『三国志演義作者與版本考論』（中華書局、二〇一二年）などが挙げられる。

- (8) 影印本には、朴在淵・金敏智校注『新刊校正古本大字音釋三国志通俗演義』（学古房、二〇〇八年）がある。周曰校朝鮮本に関する研究には、劉世徳『三国志演義』朝鮮翻刻本考論―周曰校刊本研究之二（初出：『文学遺産』二〇〇二年第五期）、『三国志演義作者與版本考論』所収）、中川論『周曰校刊『三国志演義』について』（『東北大学中国語学中国文学論集』第一六号、二〇一一年）、同氏『周曰校刊『三国志演義』の甲本・乙本・丙本』（『林田慎之助博士傘寿記念三国志論集』汲古書院、二〇一二年）、上原究一『唐氏世徳堂と周曰校万巻楼仁寿堂の章回小説刊本の覆刻及び後印の事例について』（『中国古典小説研究』第一六号、二〇一一年）などがある。

- (9) 中川論「關於九州大學所藏『三国志演義』兩種」（第十二屆中國古代小説、戲曲文獻暨數字化國際學術研討會論文集）、二〇一三年八月二三日、於復旦大學）、及び同氏『李卓吾先生批評三国志』について（『三国志研究』第一号、二〇一六年）参照。

- (10) 中川論（二〇一三）、程國賦・鄭子龍『日本九州大學藏』考訂按鑑通俗演義『三国志傳』考（『文獻』二〇一九年五月第三期）、周文業『日本九州大學藏宋鼎臣本和』『三国演義』簡本志傳小系列演化（中国古典小説研究会二〇一九年度大会、二〇一九年八月二九日、於九州大学）参照。

- (11) 朝鮮銅活字本の影印本として、朴在淵・金瑛校注『三国志通俗演義（銅活字本）』（学古房、二〇一〇年）と孫遜・朴在淵・潘建國編『朝鮮所刊中国珍本小说叢刊』（上海古籍出版社、二〇一四年）がある。本稿では、上海古籍出版社影印本を参照する。

- (12) 『三国志通俗演義』（銅活字本）提要（前掲上海古籍出版社影印本所収）を参照。

- (13) 『朝鮮王朝実録』によると、一五六九年、奇大昇が宣宗に対して、『三国志衍義』などの書物は人心を乱すものである、という旨の進言があった。ここでの『三国志衍義』はすなわち朝鮮銅活字本であるか、また奇大昇の進言によって朝鮮銅活字本の成立時期を推定できるか、という問題について、朴在淵「關於新發現的朝鮮活字本『三国志通俗演義』」（『南京大學學

報(哲學・人文科學・社會科學)二〇一〇年第三期)、劉世徳・夏薇「『三國志演義』朝鮮銅活殘本試論」(『文學遺産』二〇一一年第一期)、金文京「新発見の朝鮮銅活字本『三國志通俗演義』について」(『林田慎之助博士傘寿記念三國志論集』所収)などの論考があったが、いずれも定説に至っていない。

(14) ちなみに、朴氏は周曰校甲本に見られる「嘉靖壬子序」を根拠に、周曰校甲本の成立時期を嘉靖壬子(三十一年、一五五二)としているらしいが、この序文ははたして嘉靖壬子年の作であるかどうかという問題が定かでない以上、朴氏の判断は従い難い。

(15) 周知の通り、『三國志演義』には、通假字・異体字・俗字などが多く使用されている。これらの字と誤字との境目が曖昧なものであるため、誤字であるかどうかを判断しにくい場合もある。「正誤表」を作成する際には、諸橋轍次著『大漢和辭典』(大修館書店、一九六〇年)、『漢語大詞典』(電子アプリ版)、曾良・陳敏編著『明清小説俗字典』(廣陵書社、二〇一八年)を参考するが、個人的な判断による部分もある。

(16) 蓬左文庫蔵本。

(17) 慶應義塾大学蔵本。

(18) 中川論(二〇一六)には、一五種類の「李卓吾本」を取り上げ、これらを「甲本A・甲本B・乙本・丙本・丁本」の五つのグループに分類している。本稿では、「甲本B」に属する蓬左文庫蔵本を参照する。

(19) 付表No.5、No.9。

(20) 付表No.19。

(21) 付表No.29。

(22) 「頁」は上海古籍出版社影印本のページ数を示す。

(23) 標点本三一八頁。傍線は引用者によるもの。

(24) 影印本一二〇頁、第二行、第三行。適宜に標点と傍線を入れる。

(25) 標点本五九〇頁。比較しやすいように、傍線を入れる。

(26) この現象については、金(二〇一二)では文字の比較が詳しく行われている。

(27) 注13参照。

- (28) ここでの「朝鮮翻刻本」は、朝鮮翻刻周曰校甲本を指しており、朝鮮銅活字本とはまた異なる。
- (29) ここでの「福建系統」は、福建で出版された諸本のことであり、おおむね二十卷系に相当する。

